

2017/10/15

「三つの証し」 熊本 優子師

今日は、日頃メッセージで語られていることを、私自身がどのように受けとめているのかということをお話したいと思います。それを通して、神の福音の意味を改めて確認していただけたら幸いです。

【私たちの過去は、神を求めてきた過去】

私は幼児期、情緒不安定で手のかかる子だったそうです。3歳頃になると、昼寝の時間に、私を寝かしつけている母を逆に寝かしつけ、毎日こっそりと家を抜け出して一人で公園に行くようになりました。私にとっては、一人で大きな空の下にすることが、とても落ち着く時間だったのです。

家庭は無宗教でしたが、その頃から、困ったり苦しかったりすると、なぜか布団をかぶって「神様、助けてください」と祈るようになりました。成長するにつれ、少しでもたくさんの神様の名前を言えば助けてもらえるだろうと思い、「神様、マリヤ様、仏様…」と列挙して祈るようになり、小学生になってからは、テレビのアニメ番組で知った「イエス様」の名前もそこに加えて祈るようになりましたが、イエス様が何者なのかはまるで知りませんでした。

小学2年生のとき、父の経営する会社が膨大な借金を抱え、借金取りが家に来るようになりました。カーテンを閉めたまま息を潜めて生活する毎日は、いつも緊張感で張り詰めていて、その日その日、どうやって食べていくか、親が悩み苦しむ姿を目の当たりにしていました。そういう私の状況と学校の友達の話にはあまりにも開きがあって、私はそのギャップについていけなくなり、学校を休みがちになりました。そんな生活が一年以上続き、親はいよいよ一家心中を口にするようになりました。私はどうにもならない不安の中で、いつものように布団をかぶって「神様」と祈るしかありませんでした。家族全員が、生きる道を失い、暗闇のどん底にいたのです。

その頃、同じマンションに住む友達が、日曜学校に誘ってくれました。行ってもいいかどうか、父に聞いたところ、予想外に父は喜んで、「プロテスタントなら行ってもいい」と言ってくれたのです。私は全く意味が分からないまま、友達と一緒に日曜学校に行きました。それが今の宮前チャペルです。

教会の扉を開き、足を踏み入れた瞬間、生まれて初めて味わう、言いようのない平安に包まれました。なぜだか分からないけれど、「ああ、私が祈ってきた神様はここにいた」ということが、すぐに分かりました。それまで、ダークグレーだった私の人生は、一気に光輝く温かい「平安」に包まれたのです。そのとき初めて歌った賛美が「一つの出会い」です。

「今までの私の人生 一つの出会いで生まれ変わり
黒く重い扉は開かれ 一つの光が差し込んできた
イエス・キリストの愛を今おさえきれずに
私は生きています とこしえまでも生きる主と」

この歌を歌った瞬間、「これは私のことだ、何でわたしのことが歌われているのだろう」と思いました。生きる希望もなく、もう死ぬしか道が残されていないような状況から私は救われ、その日以来、熱心に教会に通うようになりました。家の問題は一つ解決していませんでしたが、私はこの喜びを友達に伝えたいと思って、学校にも休まず通うようになりました。家族も教会に誘い、その年のクリスマスには母が、翌年には父と兄が教会に来るようになり、家族全員が、どん底の真っ暗闇の中で、神様を信じ、洗礼を受けました。こうして私たち家族は新しい人生を歩み始めたのです。

私は洗礼を受けるとき、神様に祈って御言葉をもらいました。「あなたがたは以前は暗闇でしたが、今は主にあって光となりました。光の子どもらしく歩みなさい。」(エペソ 5:8)。これが私の人生を支える言葉となりました。

先日のメッセージで、「私たちの過去は、神様を求めていた過去」だと聞き、その物差しで自分の過去を振り返ると、本当にそうだと思われました。私が情緒不安定な幼児だったのは、この世のものでは満たされない何かを感じていたからだろうし、空の下に一人出かけていたのは、何か大きな存在を求めていたからだろうし、困ったことがあると祈っていたのも、実はそれを通して「神様」と結びつこうとしていたのだろう・・・そう思うと、確かに「過去は神様を求めてきた過去」なのだと思います。

また最近のメッセージでは、「イエス・キリストを信じれば救われる」のではなく、「神の呼びかけに応答したら救われ、その結果、イエス・キリストを信じられるようになる」ということが語られていますが、私自身の歩みを振り返ったとき、まさにその通りだと思わされます。それぞれ自分の人生を振り返ると、きっとそう確信されることでしょう。

私達は皆、生まれ育った環境も違い、誰一人同じ人はいません。しかし、その心を探っていけば、全ての人には生まれた時からずっと神を求め続けており、それがたとえどんな過去だったとしても、何一つ否定するものはありません。

【赦しを受け取る】

「それでこそ、天におられるあなたがたの父の子どもになれるのです。天の父は、悪い人にも良い人にも太陽を上らせ、正しい人にも正しくない人にも雨を降らせてくださるからです。」(マタイ 5:45)

さて、洗礼を受けた10歳の時、私は「ある一つの罪」を犯してしまい、その後10年間、その罪責感に苦しむことになりました。神様に救っていただいた喜びが満ちあふれ、感謝でいっぱいであることに変わりはありませんでしたが、一方で、夜になる度に、後悔の念に苛まれ、「何であんなことをしてしまったのだろう。あの日に戻れるなら、もう一度やり直したい。せつかく、光の子どもにされたのに、私は罪を犯して神様を裏切ってしまった。クリ

スキャンになったのに罪を犯すなんて、本当は、私は救われていなかったのではないだろうか。」と、不安な気持ちでいっぱいになりました。そして、「天国には行けないけれど、神様が私に良くしてくださったことには感謝して、せめてこの地上で精一杯神様に仕えよう」と罪滅ぼしのような気持ちで奉仕をしたこともあります。罪を犯した自分は「ダメな者」だという思いが強くなるほど、良い者になろうとする力が働き、行いがとてつもなく立派なものになっていきました。

10年経ったある日、私はついに、罪責感と自分の二面性に耐えられなくなり、教会に罪を告白しに行きました。「こんな私は教会を追放されるに違いない、それでも構わない。」と覚悟を決めて行きましたが、そのとき言われたのは、「あなたの罪はもう赦されている、これからは悔い改めにふさわしい実を結びなさい。」ということでした。

私はこのとき初めて、イエス様の十字架の意味を知りました。洗礼を受けてから10年経っていましたが、初めて十字架の赦しを自分のものとして受け取ることができたのです。イエス様の赦しは、それまでも「太陽」のように私の上に降り注いでいたのに、私はそれを受け取ることができませんでした。イエス様は、私が罪を犯して苦しむことを知っていて、二千年も前に私のために十字架にかかってくださった。罪が赦されているということを私が確認できるように、十字架に架かって愛を示して下さっていた。この事実を受け取り、自分のような罪人が赦されたことを知って、私は再び水を得た魚のようになり、ただただ神様への感謝で胸を熱くしました。

神の恵みは、誰の上にも平等に降り注いでいますが、残念なことに、人はその恵みをなかなか受け取ることができません。しかし、自分の罪に本当に絶望するとき、人は神の恵みを素直に受け取ることができるようになります。ですから、イエス様は私たちが罪に絶望することができるよう、呼びかけながら、忍耐を持って待っていてくださいます。

【罪は病気】

「イエスはこれを聞いて、彼らにこう言われた。「医者が必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です。わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招くために来たのです。」（マルコ 2:17）

高校2年生のある土曜日、私は翌日の礼拝に向けて、会堂の掃除に行きました。その日、たまたま教会は忙しく、私も黙々と掃除をし、そのまま誰とも話をしないまま、家に帰ってきました。そのことを特に気に留めてはいなかったのですが、家に着き、自分の部屋の電気をつけた瞬間、なぜだか突然、涙があふれてきたのです。自分でも驚きました。その涙の意味を考えた時、私は今日誰からも「お疲れ様」「ありがとう」と労をねぎらってもらえなかったから悲しいんだ、と思いあたりました。しかし、そのことに気づいた瞬間、私は神様への感謝から奉仕をすると言いながら、実のところ自分がほめられたくて奉仕をしていたということに気づき、愕然としました。

それ以来、私は、自分の動機が純粹ではないということにひどく悩むようになりました。何をやるにしても、心のどこかでほめられたいという思いがあり、神のために生きていと願っていても、それができない自分にぶつかったのです。何をやっても自分の為にしかできない、こういう動機でしか生きられないのは、私の性質が悪いからだと考えました。神様はこんな罪人の私を赦してくださったのに、私は純粹に神様に仕えることができない。その事実、打ちのめされ、自分を責め、生きていても仕方がないと思うまでになりました。

この悩みを抱え続けて10年以上経った時、私は初めて、「罪は病気」だという話を聞きました。人が罪を犯してしまうのは、アダムとエバが蛇に偽装した悪魔にだまされた結果、神様との関係が壊れてしまい、人類が神様との関係を失ってしまったせいだということです。これが、聖書の教える「死」であり、「死」による不安と恐怖から、人は見えるものにしがみつくようになり、自分のためにしか生きられなくなってしまった、つまり、私の動機が正しくないのは、私の性質が悪いせいではなく、全人類に入り込んでしまった「死」というウィルスのせいであり、人類は皆、罪を犯す病気になってしまったということです。この悪魔のしわざの被害者である人類を助けるために、イエス様はこの世に来て下さったというのが、神の福音だと知りました。

私は驚きました。と同時に、そのことが分かった瞬間、それまで自分を責め続けてきた気持ちから解放されました。「愛されたい」「良く思われたい」という気持ちが消えたわけではありません。ただ、それは病気であり、自分の力で抹殺することはできないものなのだから、ただ神様に癒してもらえばいいのだと思えるようになりました。罪を犯してしまう自分を否定しないで、受容できるようになったのです。

「私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです。私は、自分でしたいと思う善を行わないで、かえって、したくない悪を行っています。もし私が自分でしたくないことをしているのであれば、それを行っているのは、もはや私ではなくて、私のうちに住む罪です。そういうわけで、私は、善をしたいと願っているのですが、その私に悪が宿っているという原理を見いだすのです。」

(ローマ 7:18-19)

パウロは、自分の中に「認められたい」「ほめられたい」という動機が潜んでおり、神のためではなく、自分のためにしか生きられない自分を見つけました。このような惨めな自分を手紙の中で正直にさらけ出すことができたのは、自分の罪の原因が「死」にあることを知ったからです。

「私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。私たちの主イエス・キリストのゆえに、ただ神に感謝します。ですから、この私は、心では神の律法に仕え、肉では罪の律法に仕えているのです。」

(ローマ 7:24-25)

パウロは、自分は「死」のせいで純粋に神に仕えることはできない、本当に惨めな人間だけれども、神が救い出して下さるから感謝だと告白しています。そして、パウロは、罪を犯す自分を否定しないで受容できるようになり、自分を責める思いから解放されました。だからといって、どうせ自分は罪人なんだから、罪を犯そうという心境にはならないとも述べています（ローマ 6:1, 2, 15）。

人はそもそも、神に似せて造られた存在で、神様が人のために生きてくださるのと同じように、人も神様のために生きることができる存在でした。神と人は、そういう「まことの友」の関係だったのです。だからこそ、クリスチャンはみな、「神のために」生きたいと望みます。しかし、自分の現実を見ると、とても「神のために」と言えるようなことはできていない、そういう自分に漠然とした罪悪感を覚えているので、つい普段の罪滅ぼしとして、せめて「神のために」これだけのことはしようと、行いで「神のために」生きようとしてしまうのです。私自身がそうでした。自分の日常を「ダメなもの」だと否定して、何かをやることで、少しでも「神のために」生きようとしてしまうのです。それが「死」が入り込んだ世界で生きる、私たちの現状です。

しかし、イエス様は、私たちが「罪の病気」のせいで、純粋に「神のために」生きられないことを知っておられます。ですから、今、イエス様が望んでおられることは、「神のために」ではありません。イエス様が私たちに求めておられるのは、「神と共に」歩むことです。イエス様は、私たちの歩みを否定したり、ダメなものだといって切り捨てたりすることはなさいません。むしろ、一人一人がいる「日常」を肯定し、その場所に寄り添って下さいます。そして、「神と共に」歩みながら、「愛されたい」「良く思われたい」という動機でしか歩めなくなった自分を正直にさらけ出し、神の治療を受けてほしいと願っておられます。なぜなら、「愛されたい」「良く思われたい」という動機は、その人の重荷となって、その人自身を苦しめるからです。

「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます」（マタイ 11:28）

「イエスはこれを聞いて、彼らにこう言われた。「医者が必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です。わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招くために来たのです。」（マルコ 2:17）

人は誰でも、「生きる」という大きな役割を担っています。誰もあなたの代わりには生きられないし、たとえ神であってもあなたの代わりに生きることができません。皆それぞれが、「生きる」ことに真剣に向き合うしかありません。そのあなたの「生きる」という仕事の中で、神様はあなたと共に歩き、あなたの重荷を背負い、あなたの罪の病気を癒していこう、と言って下さっています。私は、「罪は病気」だということが分かり、こうした歩み方が見えてくるようになりました。